

# クライアント主観に根ざした心理療法研究の動向と展望

加藤 碧子 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

## 要約

あらゆる心理療法においてクライアントは、単なるサービス受容者ではなく、その治療的効果の成否に関わる重要な存在である。そのため、クライアントの主観やクライアントの視点を用いて心理療法研究を行うことは、心理療法の理論的・臨床的な発展のために重要である。そこで、今後のクライアント主観に根ざした研究の展望を示すために、これまでの先行研究のレビューを行った。心理療法は「サービス」「相互作用」「人生の契機(変容)」という様々な側面を持つ多面的な営みであり、そのような側面をクライアントの立場から捉え直すことで、クライアントの視点に近づくことの意義と今後の研究の方向性を明らかにした。

**キー・ワード**：心理療法，クライアント主観，質的研究，多元性

## I はじめに

### 1. 心理療法におけるクライアントの存在的意義

心理療法は、クライアントの主観的な苦痛を、対話によって治癒あるいは軽減する社会相互作用的な実践である。心理療法には、様々な理論的アプローチがあるが、それらほぼ全てに共通することとして、セラピストがクライアントを理解することを重視する(岩壁, 2008) ことがある。心理療法はクライアントとセラピストという二者関係における人間的な関わりの中で、クライアントの主観的世界を共感的に理解することでクライアントの成長を促す治療的効果があると考えられている(岩壁, 2008)。そのため、クライアントは単なる心理療法というサービス依頼者(client)だけでなく、心理療法実践のための主体者でもある。

クライアントが心理療法において重要な存在であることは、心理療法の効果研究においても実証的に示されている。心理療法の効果の割合としてよく知られている「ランバートの円グラフ」(Asay

& Lambert, 1999) では、効果研究のメタ分析の結果、心理療法に効果を与える要因の割合として、技法・モデル要因が約15%、期待感とプラシーボ効果が約15%、セラピーにおける人間関係が約30%、クライアント変数と心理療法外の出来事が約40%であると推定されている。心理療法の種々の技法や、セラピストとの関係性以上に、クライアントに関わる要因が心理療法の効果に大きな影響を果たしていることが示唆される。このため、クライアントは全ての心理療法において最も重要な共通要因である(Bohart, A.C., 2000) と考えられる。

心理療法の営み自体がクライアントの主観的世界に近づこうとするものである一方で、クライアントの主観的世界を完全に理解することは容易なことではない。実際に、必ずしもクライアントとセラピストの視点は一致しておらず、青木(2020)は、中断したクライアントの中には十分な援助が得られたと主観的に判断したため、治療に戻らな

かった者もいるという指摘を用いて、セラピスト側の枠組みだけでなくクライアント主観を尊重する必要性を指摘する。つまり、クライアントは、心理療法における唯一無二の主体であり、クライアント視点からでしか捉えられない体験が多くあると考えられる。

## 2. クライアントの主観に根ざした研究の概観

クライアントはあらゆる心理療法に共通して役割を果たす存在であり、変化の主体者でもあることから、心理療法においてクライアント主観の経験を明らかにすることは、理論的、臨床的な発展において重要なことであるといえる。しかし、もともと心理療法研究は、実証パラダイムにおいて客観性が重視されており、治療同盟の担い手であるセラピスト視点からや、介入技法としての理論的観点から行われる研究が多かった。クライアント主観を扱った研究は、クライアントの情報の信頼性の低さや、クライアントを研究対象とする倫理的な問題のために、研究の数は少数であった(岩壁, 2008)。近年では、心理療法におけるクライアント要因が、徐々に見直される中で、クライアント視点に近づこうとする研究は増えつつある。

心理療法研究において、心理療法を評価する変数を抽出するためには、人がどのように変化するのかについて、しっかりと経験的に裏付けられた理論的説明が必要であり、そのための方法として質的研究法が有効であると指摘される(Stiles, 2013)。その一方で、質的研究は、量的研究とは異なり数値によらないデータを扱うものであり、インタビューする際の記憶の補正や、主観の不確実性、分析者の恣意性などの課題もある(Rodger & Elliott, 2015)。このような課題に対し、直前の面接ビデオを見ながらインタビューすることで、記憶の補正に対処しようとする対人プロセス想起法(IPR)など方法上の工夫がなされるようになってきている。質的研究の精度が上がってきたことにより、クライアントの主観により接近することが可

能になってきている。

研究においてクライアント視点を用いることが役立つ具体的な領域としては、岩壁(2008)は、心理療法においてクライアントにとって役立つ経験、セラピストの盲点になる領域、困難な場面におけるプロセス研究をあげている。また、Timulak(2017)は臨床的に役立つ質的研究をレビューする中で、クライアント主観を用いた研究は、クライアント視点の心理療法の経験の様々な側面とクライアント視点が関係する理論構成の二つに大別され、例外的に心理療法に対する満足度を研究したものと述べている。

このように心理療法研究において様々な観点からクライアント視点を用いることの新鮮さや意義が掲げられており、今後の心理療法研究の発展ために重要な視点になると考えられる。

## 3. 本稿の目的

クライアントは、サービス受容者、変化の主体者、生活者など常に多面的な側面を持つ。さらに、心理療法自体も、これらに対応して、社会的利益となる社会サービスとしての側面、クライアントとセラピストとの二者関係によってプロセスが進行する側面、クライアントの変容を促進する治療的な側面などをもつ多元的な営みである。そのため、心理療法の何に、誰の目線で焦点を当てるかによって、捉えられる事実は大きく異なってくると考えられる。

そこで、本稿ではこのように多元的な側面をもつ心理療法という営みを、クライアントの視点を中心として捉え直し、今後の研究に必要な観点を明らかにすることを目的に、心理療法におけるクライアントの主観をテーマに行われている研究のレビューを行った。心理療法をクライアントの立場から捉えた場合、「社会的サービス」「セラピストとの相互作用」「人生の契機(変容)」という少なくとも3つの側面があると考えられることから、この3つの側面を用いて検討した。

クライアントの主観を扱った国内の論文数は少数であり、セラピスト視点から事例研究を行ったものがほとんどである。そのため、本稿では国内の文献を用いながら、適宜国外の研究論文からもレビューを行った。

## II 社会的サービスとしての心理療法

多くのクライアントは、代金を払ってサービスを依頼し、専門家に心理療法を受けに行く顧客という一面もある。そのため、クライアントの利益に見合った心理療法をクライアントが選択できるようなサービスの向上をはかるためには、相対的なクライアントの満足度やニーズをよりの確に理解することが求められる。

### 1. クライアントの心理療法に対する認識

顧客としてのクライアントが心理療法というサービスに対してどのような理解を持っているかを系統的に把握するような研究が行われている。例えば、クライアントの心理療法に対する動機付けの高低や、心理療法の結果やプロセスに対する期待の差によって心理療法の効果に差が見られることが示唆されている (Cooper, 2008)。これらは、クライアント視点から心理療法に対する認識がどのように影響を及ぼすかを検討したものである。

また、心理療法には、精神力動療法、認知行動療法、クライアント中心療法などの様々な学派の違いがあるが、それら学派の違いをクライアント視点から捉え直した研究もある。野村 (2017) は Berg et al. (2008) の研究を引用しながら、クライアント視点では、学派理論の違いは、内省を重視する「内向性」、現実的な行動を重視する「外向性」、セラピストによる「サポート」、感情を表出させる「カタルシス」という4側面から捉えられていると示している。さらにこれら4つの側面に対するクライアントの理論選好を考慮することで、心理療法の効果を高める得ることも指摘されている (Swift & Callahan, 2009)。

これらは心理療法の効果に影響を与えるクライアント変数として考えられ、クライアントの認識を対象化し定量的なデータとして扱われている。

### 2. クライアントの心理療法に対する満足度

クライアントの心理療法に対する認識に加えて、クライアントが心理療法に対してどの程度満足しているか、ニーズを把握することは、ドロップアウトの予防など、心理療法を実践する上で重要となる。このようなものの一つに、クライアントフィードバックシステム (Client feedback system) というものがある。これは、心理療法の面接ごとにクライアントの状態を尺度によって簡単迅速に評価し、クライアントの情報をセラピストが量的に把握することで、クライアントのニーズに対して、即座に効果的に対応することを試みたものである (Lutz et al., 2015)。実際に、クライアントフィードバックシステムによって、心理療法セッションの進捗を把握することで、セラピストによる治療的失敗を防ぐことが検証されている (Lambert & Shimokawa, 2011)。

クライアントにある程度共通する満足度や、認識といった側面から研究することで、心理療法の効果の向上が図られている。

## III 相互的・人間のかかわり合いとしての心理療法

心理療法では、クライアントとセラピストの治療関係が重視されており、セラピストとクライアントが相互作用することで心理療法は進んでいく。Elliott (2008) は、クライアント視点からこのような心理療法を研究することで、治療過程が面接後や終結後の変化にどのように反映されるのかといった心理療法の媒介過程についての理論的理解を深める上で中心的な役割を果たすと指摘する。さらに、クライアントの経験の潜在的な範疇や質を理解することは、治療的介入技術についての重要な要素であり、特定のクライアントに対する理解

を深め、より効果的な介入につなげうると述べる。そこで、心理療法内で起きた出来事をクライアント視点から捉えた研究をここでは主にレビューする。

### 1. クライアント視点からみた心理療法体験

心理療法におけるクライアント視点をを用いた研究として多く行われているのは、心理療法において役立った側面、重要な側面、多くはないが妨げになった側面に関する研究である。Rennie (1994) はクライアントに直前の面接場面を振り返ってもらい、何らかの点で意味があると感じた点について語ってもらうことで研究を行ったが、これがクライアントの体験についての研究の礎となっている。Timulak (2017) によれば、心理療法における役に立った側面や妨げになった側面に関する研究は、特定のクライアント群や、心理療法アプローチごとなど、様々な要素に焦点を当てて行われている。さらに、このような研究は、クライアントの主観からボトムアップ的に心理療法の理論を検討することを可能にすると指摘する。

また、近年は、これらのクライアント視点をを用いた質的研究の蓄積から、質的メタ分析することで新たな心理療法概念を生成する動きもある。Levitt, et al. (2016) は、心理療法内でどのような要因がどのような時に起こっているかという、心理療法全体に共通するクライアント視点の枠組みを示すことを目的に、クライアント視点から行った109の質的研究の論文を用いて質的メタ分析を行っている。質的メタ分析とは、的確基準に沿った研究群を、改めて質的に分析する手法である。その結果、クライアント視点から見出されたあらゆる心理療法に共通する要素として、①心理療法は、クライアントが好奇心をもって自らの行動・認知の様式に気づき、語りの再構築に深く関与することで起こる変化のプロセスであること ②理解と思いやりをもつセラピストの肯定的なメッセージを内在化して自己への気づきを高めること

③治療関係の枠組の中でセラピストの専門性への信頼を感じる一方、専門家としての役割や枠組が、治療関係の純粋性への疑いやセラピストとの間の壁として体験されること ④セラピーは協働作業として進み、治療関係での力や役割の違いは、対話により調整されること ⑤セラピストがクライアントのニーズに応えることでクライアントの主體的関わりが促されること、が示された。このような研究結果を用いて、心理療法全般にみられる共通要因の働きを明らかにし研究の方向性を得るために、セラピストからの視点ではなく、クライアントが心理療法において何をもたらしているかを考慮することの重要性を強調している。

### 2. 特定の側面のクライアントの体験

心理療法における特定の側面に焦点を当てて、クライアントの視点から質的に研究をおこなったものもある。例えば、草岡・岩壁・橋本 (2017) は心理療法の初期のクライアントの体験に限定し、クライアントの主観的体験をセッション直後にインタビューを行っている。それらをグラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下GTA) で分析することで、初回面接においてクライアントが継続を決める鍵や、ドロップアウトが起きる面接の特徴を明らかにしている。同様に、横田は博士論文研究 (2019) において、クライアントの初期の自己中断に着目し、インタビューデータをGTAで分析することで、面接初期において来談継続か中断に至る探索的なモデルを生成している。

このように特定の場面でのクライアントの経験を明らかにすることで、実際の介入に役立つような知見が得られている。

## IV 人生の変容の契機としての心理療法

心理療法における変容の担い手はクライアント自身であり、心理療法において何が起きているのかを真に体験しているのはクライアントだけである。また、クライアントにとって、心理療法は

人生の一つの契機に過ぎず、常に心理療法外でのつながりに影響を受けている。このような観点から、クライアントの主観を明らかにしようとしたものを以下にあげる。

## 1. 変容の体験

クライアントが説明した心理療法における重要な事象が実際に成果に関与しているのか検討されている (Pivolusková, et al., 2019) ように、クライアントにとって心理療法の中で役に立った経験が説明されたとしても、それが本当に治療的に意味のあるものかどうかはわからない。そのため、何が変化しているかだけでなく、どのように変化しているかに対するクライアントの認識を明らかにすることも重要であると考えられる。

こうした点から、Heatherington, Constantino, Angus, Friedlander, & Messer (2012) は、心理療法における変容の体験として知られる修正感情体験に焦点を当て、クライアントはどのようなときに、どのようにして「修正された」と感じるかについて 5 つの心理療法アプローチ群に分かれた 76 人のクライアントの体験を、量的尺度とインタビューを用いて分析している。その結果、クライアントは、洞察、気づき、自己理解といった用語に示されるような、「知らない」状態から個人的に重要で問題や治療中に生じた懸念に関連する何かを「知る」状態への転換を修正的なものとして経験したことを示唆している。また、セッション内の出来事に限らず、セッション間での振り返りやセラピストから教授されたテクニックの実行が修正的な経験を説明すると捉えていることも示している。

また国内において青木 (2020) は、心理療法の成果を質的に明らかにすることに焦点を当て、3 回のブリーフセラピーの前後で、クライアント自身がどのように問題に対する認識と、問題に対する関わりが変化しているのか、自由連想法とクラスター分析を組み合わせた PAC 分析と修正版

GTA を用いて複数事例に基づく探索的な仮説生成を行っている。その結果、クライアントが抱える問題も含んだ世界に対し主体的に関与することができ、その価値をポジティブに感じ取りやすく、かつ、主体としてコントロールが効くことの 3 点が重要であることを示唆している。

## 2. 変容の良い結果と悪い結果

一方、クライアントの視点から心理療法においてなんらかの変化が示唆されたとしても、それが臨床的に良い結果と関連しているかはわからない。そのような点から、臨床的に良い成果と悪い成果に関するクライアントの体験の差を研究しているものもある。

McElvaney & Timulak (2013) は、心理療法の終結後に、量的な指標によって臨床的意義のある変化が得られたクライアントと、得られなかったクライアントのそれぞれの体験を比較研究している。その結果、セラピストからのサポートを重視するか、自らの自律性を重視するかといった心理療法における積極性にはわずかな差がみられたものの、それぞれが体験した心理療法とその影響に関する質的な説明にはほとんど差がみられなかった。

このような文脈から、De Smet & Meganc, et al (2020) は、大うつ病の患者に対し、認知行動療法あるいは精神力動療法によって「回復」あるいは「改善」したクライアントの体験について量的尺度と質的分析による混合研究法によって、良い成果が得られた場合にはどのような体験があったのかをクライアントの主観的体験から検討している。その結果、良好な結果を得たとしても、必ずしも良い変化だけを体験しているわけではないことを示している。

このように心理療法の効果や成果との関連から、心理療法のプロセスや役割を検討する研究も増えている。

### 3. 日常生活とのつながり

心理療法内での体験はクライアントという人生そのものにも波及していくものであり、さらに、心理療法における変化は、心理療法内で完結しているわけではなく、心理療法外の事柄にも影響を受けている (De Smet & Meganck, 2018)。そのため、面接内でのクライアントの主観的経験だけでなく、面接間や心理療法の終結後の体験の広がりについても、理解することが重要である。

高山 (2017) は、非臨床群の大学生の協力者に対し全1~3回の試行カウンセリングと面接後のインタビューを行い、治療関係が良好だと認識したクライアントは、自発的に面接内の体験を日常生活で活用していることを明らかにした。同様に、山崎 (2023) は、統合的心理療法を受けた4人のクライアントに対し、心理療法の終結までの主観的な体験についてのインタビューを行い、一定の条件を統制した系統的な複数事例研究を行っている。GTAで分析した結果、「面接を主体的に活用する」というカテゴリーが抽出されている。これは、面接の中で得られた気づきの体験を、主体的に日常生活にも活かすことで面接外に拡張していると考察され、さらに心理療法の体験は面接内だけにとどまらず、面接外の日常生活での変化としても体験されていると示唆している。

また、心理療法の長期的な影響についても検討の余地がある。Wucherpfennig, et al. (2020) は、認知行動療法の終結後3年を経過したクライアントに対し、量的評価とインタビューを実施し、面接時の変容過程を変化要因としてカテゴリー化し、それらをクラスター分析することで、変容と効果の持続を検証した。その結果、変化要因が高いほど、臨床的回復が見られていることが明らかになっている。

全人的な自己の変化として、面接内での変化が面接外の日常生活での変化に波及していることが示唆されているが、面接内外での心理療法の体験の広がり、はまだあまり詳細には明らかになって

いない。

## V 考察

これまで、クライアントの立場から心理療法を捉え直した時の3つの側面について、どのようにしてクライアント主観が用いられているのか先行研究を概観してきた。ここでは、これまでのことをまとめるとともに、今後の心理療法研究における可能性について考察していく。

### 1. 心理療法の多元性とは何か

心理療法は、クライアントの困りごとを主訴にはじまり、クライアント自身が変容していく、クライアントを中心にした実践である。しかし、そこには、セラピストから捉えられた現実、クライアントの現実、さらに社会に開かれたサービスとしての現実など、多層的な現実がある。心理療法は、心理療法内の出来事だけで完結せず、心理療法外の出来事とも相互に影響しあい、心理療法内においてもクライアントとセラピストの相互作用によって機能している。

このような多元的な心理療法を、実践において一側面から限定的な理論を用いて捉えることはリスクを伴うことと考えられている。そのため、Cooper & McLeod (2010) は、心理療法の多元的アプローチを推奨している。治療ガイドラインに沿って、一つのアプローチに縛られることの危険性を主張し、何が役に立つかは人や時によって異なるという前提のもと、心理療法の多元性の維持を提唱する。クライアントは、一つの「問題」をもつ固定的な存在ではなく、心理療法の最も大きな共通要因でありながら、かつ自己治癒者 (Bohart, A.C., 2000) としてあらゆる可能性に開かれた存在である。

様々な問題を抱え、多様なバックグラウンドを有する非常に個別性の高いクライアントだからこそ、心理療法は生物心理社会モデルに基づいたアセスメントのもと、オーダーメイドで行われる。

心理療法には様々な変容理論に基づくアプローチがあるが、これらの理論概念が個別性の高い全てのクライアントに対応できるかはわからない。そうであるからこそ、クライアントからしか捉えられない現実を掬い上げるために、クライアント視点に近づくことの意義が強調されている。

## 2. クライアント視点に近づくことでわかること

クライアント視点から明らかにされることが必ずしも治療的に役立つものとは限らないということもある。しかし、どのようにクライアントがある事象を認識しているかといったことや、どのような現象がクライアント内に生じているかなど、クライアント視点でのポイントを明らかにしていくことで、全般的な理論や介入に役立つ新たな理論を構築することができる。それは、心理療法の介入につながるような実践的な手段ではないかもしれないが、心理療法の介入に役立てられる理論の枠組みとして示すことができる。

これまでの心理療法におけるクライアント主観やクライアントの視点を用いた研究は、セラピストが困難に感じる場面や、心理療法の理論を起点として全般的な経験をクライアントの視点から捉えることで、セラピストの介入に活かそうとするものが多かった。しかし、まだ研究の数は多くはないが、クライアントの内的な変化や、心理療法内だけにとどまらない、セッション間や心理療法外の出来事との横断的な関連をクライアント視点から示唆を得ようとするものもある。クライアントは生活の中の一部として心理療法を体験しているのであり、心理療法内での変容が心理療法外での生活に生かされ、心理社会的な機能として改善していくことも重要である。そのため、このようなセッション外との関連を明らかにすることは、心理療法のプロセスだけでなく、心理療法の効果や意義を示すものとなる。

クライアント主観には、客観性はないかもしれないが、一つの事実として再構成されていくこと

で、理論的な理解へとつながり、心理療法の意義を再認識することができるであろう。

## 3. クライアント視点を研究で扱うことの課題と展望

インタビューや質的な記述では、必ずしもクライアント自身の経験をそのまま再現することはできない。対人プロセス想起法といった方法的工夫をすることで、直前のセッションを振り返るためよりリアルに近い声が得られると考えられるが、一方でセッション直後の振り返りは、インタビュー自体が心理療法の再現として治療的な影響を及ぼしている可能性が指摘されている(野村, 2013)。さらに、全般的なインタビューにおいても、クライアントとインタビュアーの間に相互作用が生じていることが想定される。そのため、クライアント視点に近づこうとする研究において、「研究者・実践者」の存在が重要となる。

クライアントの視点を研究するためには、心理療法そのものの多元性も考慮しながら、研究において不問にされている、研究者自身のスタンスを明らかにすることが重要になる(野村, 2013)。そして、クライアントの語りがどのようにして生成され、何について語られているのか注意して取り組むことが必要となると考えられる。

心理療法は個人間の関わりであることに加えて、社会的に開かれたサービスである。閉ざされた二者関係から、心理療法内で何が起きているのか、さらに心理療法は何に役立つのか、広い世界へと開かれていかなければいけない部分もある。臨床的に、社会的に意義のある効果とはどのようなものなのか。そのようなことを考えながら、心理療法の意味を明らかにしていることが求められるであろう。これまでのことから、そのためにクライアントの視点を用いることは役立つと考えられる。

## 4. 今後の研究課題

具体的な研究課題としては、まずクライアント

の視点から心理療法内外のつながりをより詳細に検討することが求められる。先にも述べたように、クライアントは一生活者であり、コミュニティにおいて機能を果たす存在である。そのために、心理療法内での気づきに代表されるような変容がどのようにして心理療法外に生かされ、行動としても変化していくのか明らかにする必要がある。生物心理社会的に本当に意味のある変化を追求していくことが求められるであろう。

また、同様にしてこのような観点から、心理療法の長期的な影響についても検討の余地があると考えられる。心理療法の効果検証では多くの研究で1年後のフォローアップまでは検討されているが、それ以上の効果は実証的にも示されていないのが現状である。心理療法の多くは、治療を目指すものではなく、クライアントの自己成長を促進するものと考えられるが、そのように身につけられた主体性は維持されるのか、それとも一時的なものなのか、その間に心理療法の体験はどのように関わっているのかなど検討することができよう。

また、国内ではクライアント主観を用いた心理療法研究論文数は数えるほどしかない。国外との文化的差異も考えられるため、国内においても心理療法のアプローチの違い、臨床群の違いなどの様々な要素を考慮しながら、クライアントの立場を用いて多方面から研究することが求められる。

<付記> 本稿執筆にあたり、ご指導賜りました山田美穂先生に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 青木 みのり (2020). 「クライアントの視点」再考ブリーフセラピーからの一提言 晃洋書房
- Assay, T.P. & Lambert (1999). The empirical case for the common factors in therapy: Quantitative findings. In M. A. Hubble, B. L. Duncan, & S. D. Miller (eds.), *The Heart and Soul of Change: What Works in Therapy*. Washington, DC, US: American Psychological Association, 23-55.
- Berg, A. L., Sandah, C., & Clinton, D. (2008). The relationship of treatment preferences and

- experiences to outcome in generalized anxiety disorder (GAD). *Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, 81, 257-259. <https://doi.org/10.1348/147608308X297113>
- Bohart, A.C. (2000). The Client Is the Most Important Common Factor: Clients' Self-Healing Capacities and Psychotherapy. *Journal of Psychotherapy Integration*, 10(2), 127-149. <https://doi.org/10.1023/A:1009444132104>
- Cooper, M., McLeod, J. (2010). *Pluralistic Counselling and Psychotherapy*. SAGE Publications Ltd
- Cooper, M. (2008). *Essential Research Findings in Counselling and Psychotherapy: The Facts are Friendly*. SAGE publications: London (清水 幹夫・末松 康弘 (監訳) (2012) .エビデンスにもとづくカウンセリング効果の研究—クライアントにとって何が最も役に立つのか— 岩崎学術出版社)
- De Smet, M., Meganck, R., Truijens, F., De Geest, R., Shana Cornelis, Ufuoma Angelica Norman & Mattias Desmet (2020). Change processes underlying “good outcome”: A qualitative study on recovered and improved patients' experiences in psychotherapy for major depression. *Psychotherapy Research*. <https://doi.org/10.1080/10503307.2020.1722329>
- De Smet, M., & Meganck, R. (2018). Understanding Long-term Outcome from the Patients' Perspective: A Mixed Methods Naturalistic Study on Inpatient Psychotherapy. *Psychologica Belgica*, 58(1), 276-296. <https://doi.org/10.5334/pb.432>
- Elliott, R. (2008). Research on client experiences of therapy: Introduction to the special section. *Psychotherapy Research*, 18(3), 239-242. <https://doi.org/10.1080/10503300802074513>
- Heatherington, L., Constantino, M. J., Angus, L., Friedlander, M., & Messer, S. (2012). Corrective experiences from clients' perspectives. In L. G. Castonguay & C. E. Hill (Eds.), *Transformation in psychotherapy: Corrective Experiences across cognitive behavioral, humanistic, and psychodynamic approaches*, 161-190. Washington, DC: American Psychological Association.
- 岩壁 茂 (2008) . プロセス研究の方法 新曜社
- 草岡 章大・岩壁 茂・橋本 忠行 (2017) . 初回面接におけるクライアントの主観的体験の質的研究 臨床心理学, 17(6), 940-949.
- Lambert, M. & Shimokawa, K. (2011). Collecting Client Feedback. *Psychotherapy Theory Research Practice Training*, 48(1), 72-79. <https://doi.org/10.1037/a0022238>
- Levitt, H.M, Pomerville, A., Surace, F. I. (2016). A Qualitative Meta-Analysis Examining Clients' Experiences of Psychotherapy: A New Agenda. *Psychological Bulletin*, 142(8), 801-830. <https://doi.org/10.1037/bul0000057>



- Lutza, W., Rubela, J., Schiefelea, A-K., Zimmermann, D., Böhnke, J.R. & Wittmann, W.W. (2015). Feedback and therapist effects in the context of treatment outcome and treatment length. *Psychotherapy Research*.  
<https://doi.org/10.1080/10503307.2015.1053553>.
- McElvaney, J. & Timulak, L. (2013). Clients' experience of therapy and its outcomes in 'good' and 'poor' outcome psychological therapy in a primary care setting: An exploratory study. *Counselling and Psychotherapy Research*, 13(4), 246-253.  
<https://doi.org/10.1080/14733145.2012.761258>
- 野村 晴夫 (2013) .心理療法のプロセス研究におけるナラティブ・アプローチの意義—研究者の「私」の表し方, クライアントの視点への近づき方. N : ナラティブとケア, 4, 9-15.
- 野村 晴夫 (2016) . クライアント・ナラティブと心理療法の多元性 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 42, 225-272. <https://doi.org/10.18910/57218>
- Pivolusková, H., Řiháček, T., Čevelíček, M., & Ukropová, L. (2019). Are client- and therapist-identified significant events related to outcome?: A systematic review. *Counselling Psychology Quarterly*.  
<http://doi.org/10.1080/09515070.2019.1642851>
- Rennie, D. L. (1994). Clients' deference in psychotherapy. *Journal of Counseling Psychology*, 41(4), 427-437. <https://doi.org/10.1037/0022-0167.41.4.427>
- Rodgers, B., & Elliott, R. (2015). Qualitative methods in psychotherapy outcome research. In O. C. G. Gelo, A. Pritz, & B. Rieken (Eds.), *Psychotherapy research: Foundations, process, and outcome*, 559-578. Springer-Verlag Publishing/Springer Nature. [https://doi.org/10.1007/978-3-7091-1382-0\\_27](https://doi.org/10.1007/978-3-7091-1382-0_27)
- Stiles, W. B. (2013). The variables problem and progress in psychotherapy research. *Psychotherapy: Theory, Research, & Practice*, 50, 33-41. <http://dx.doi.org/10.1037/a0030569>
- Swift, J. K., & Callahan, J. L. (2009). The impact of client treatment preferences on outcome: A meta-analysis. *Journal of Clinical Psychology*, 65, 368-381. <https://doi.org/10.1002/jclp.20553>
- 高山由貴 (2017) . クライアントの主観的体験から見た心理面接のプロセス 東京大学博士学位論文 (未公刊)
- Timulak, L. & Keogh, D. (2017). The client's perspective on (experiences of) psychotherapy: A practice friendly review. *Journal of Clinical Psychology* 73, 1556-1567.  
<https://doi.org/10.1002/jclp.22532>
- Wucherpennig, F., Boyle, K., Rubel, J.A., Birgit Weinmann-Lutz, Wolfgang Lutz (2020). What sticks? Patients' perspectives on treatment three years after psychotherapy: A mixed-methods approach. *Psychotherapy Research*, 30(6), 739-752.  
<https://doi.org/10.1080/10503307.2019.1671630>
- 山崎 和歌子・岩壁 茂・福島 哲夫・野田 亜由美・野村 朋子 (2023) . 統合的心理療法におけるクライアントの主観的体験—成功4事例の複数事例研究—臨床心理学, 23(3), 329-338.
- 横田 悠季 (2019) .心理療法初期における治療関係構築に効果的なセラピストのコミュニケーション—クライアントの視点から— お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 2019 年度博士学位論文 (未公刊)